

ユスティニアヌス軍財務官とビザンツ艦隊

小林 功

はじめに

7世紀中盤以降、ビザンツ帝国は地中海においてもアラブと激しく戦った。654年に起きたと思われるリュキア沖海戦（いわゆる「マストの戦い」）や、ビザンツ艦隊が装備していたといわれる「ギリシアの火」などは、比較的よく知られている。ビザンツ帝国に、7世紀後半以降に艦隊が存在していたことは、疑問の余地がない¹⁾。

しかしながらそれ以前、7世紀前半までの状況は不明である。後述するように、7世紀前半以前でも艦隊と思われる存在は資料から確認ができる。しかしながらそれ以前の艦隊の状況については、以下でみるように議論がある。

7世紀前半以前の艦隊の状況を考える上でしばしば言及されるのが、「ユスティニアヌス軍財務官管区 *Quaestura Justinianus Exercitus*」(以下、QE)である。QEは536年にユスティニアヌス1世(在位527-565年)が公布した新法41によって新設された組織である。旧稿でも触れたように、QEは管轄する属州が地中海側(キプロス、カリア、諸島)とバルカン半島側(第2モエシア、スキティア)という、相互に大きく離れた地域にわかれている(地図参照)ことなど、きわめて特異な特徴を持っていた²⁾。

何ゆえQEがこのような特異な管轄区域を持つのか、長官であるユスティニアヌス軍財務官 *Quaestor Justinianus Exercitus* の権限とあわせて、これまでも関心が寄せられてきた。その中で大きな影響を持ったのは、ジョーンズの研究である。彼はQEの特異な管轄区域は、当時疲弊していたドナウ流域の2属州を支えるため、比較的富裕な地中海側の属州と組み合わせられたと考えた。そしてドナウ流域に展開していた軍団に対する補給を重要な任務としていたと論じた。またQEは以前からあったオリエンス道管区 *Praefectura Praetorio Orientis* (以下、PPO)の一部を分割するかたちで設置されているが、ジョーンズはQEもまたPPOと同様、事実上の道管区として設置されたと考えている³⁾。

行政管区としてのQEに関するジョーンズの分析は基本的には現在まで踏襲されており、QEがPPOなどと同様、複数の属州を統括する行政管区であること、また第2モエシアとスキティアという、北方からの脅威を受けるドナウ下流域の属州に展開する軍隊の補給の責任を負っていたことは、研究者の間ではほぼコンセンサスになっている。

一方QEは、7世紀後半以降資料で言及されるビザンツ艦隊(カラビシアノイ)や、8世紀以降の海のテーマ、キビュライオタイとの関連性や連続性などについても関心が寄せられてきた。この点との関連で今日にいたるまで議論が分かれているのが、ユスティニアヌス軍財務官が管轄地域における軍隊の指揮権を保持していたのか否か、という点である⁴⁾。

ユスティニアヌス軍財務官の軍事権限については、ディールやスタンらによる初期の研究では、ユスティニアヌス軍財務官が管轄区域内における軍事指揮権を持っていたと論じられている⁵⁾。一方



地図 ユスティニアヌス軍財務官管区に属する属州 (灰色)

A. H. M. Jones, *The Later Roman Empire 284-602*, Oxford, 1964, Map VI を筆者が一部修正

で20世紀中盤のアルヴェレルやアントニアディス=ビビクーらは、7世紀後半以降のビザンツ帝国の艦隊とQEとの関連性・連続性を顧慮していない⁶⁾。ジョーンズもまた、ユスティニアヌス軍財務官が軍、特に艦隊の指揮権を保持していたかについては言及していない。

ユスティニアヌス軍財務官が軍事権限を持っていたとする見解は、20世紀後半にはサデツキ=カルドシュ⁷⁾が主張し、21世紀に入ってからでもクルタ⁸⁾やブランデスによって主張された。ブランデスは新法148(566年)にある“τοῦ ἐνδοξοτάτου Ἰουστινιανοῦ ἐπάρχου τῶν ἐπὶ Μυσίας καὶ Σκυθίας στρατιωτικῶν καταλόγων”や、新法163(575年)にある“τῶν ἐπὶ Σκυθίας τε καὶ Μυσίας στρατιωτικῶν ταγμάτων”といった文言を根拠として、ユスティニアヌス軍財務官が軍隊に対する指揮権を有していたと論じている⁹⁾。

一方、近年はユスティニアヌス軍財務官は完全な行政官職であり、軍事権限を持っていなかった、とする見解も有力である。トルバトフはQuaestorという語が一般には「軍指揮官」を含意しないことを指摘した上で、QEはドナウ流域の軍団に対する補給の任務を持っていたが軍事権限は持っていなかったと論じており¹⁰⁾、いわば(ヴィエヴィオロフスキーが述べるように¹¹⁾)ジョーンズの議論を受け継ぎ、行政官職としての性格を強調した議論をおこなっている。同様の考え方はイヴァノフ¹²⁾や

ザッカーマン、中谷功治氏¹³⁾らによっても継承されている。

このような考え方に対して反論をおこなっているのがヴィエヴィオロフスキーである。彼は上述した新法 148 や新法 163 の文言に加え、ユスティニアヌス 1 世が発布した新法 41 に関連する同時代の証言を再検討するなどして、QE が管轄区域内の守備隊に対する指揮権を持っていたと論じている¹⁴⁾。一方サランティスはより慎重な態度を取り、ユスティニアヌス軍財務官がドナウ下流域の守備隊や艦隊と少なくとも協力していたことを認めた上で、ユスティニアヌス軍財務官が軍事権限を持っていた可能性もあると考えている¹⁵⁾。

QE をめぐる議論においても一点無視できないのが、既に名前を挙げているクルタの考察である。クルタは考古学資料をも積極的に活用しつつ、古代末期～ビザンツ期のバルカン半島の状況について、精力的に分析をおこなっている研究者である。クルタは、古代末期に軍隊への補給物資（アンノナ・ミリタリス）を輸送する際に広く利用された、LR1 と LR2 というタイプのアンフォラが、QE のバルカン側領域に相当するドナウ流域地域では 6 世紀末のティベリウス 2 世（在位 578-582 年）の時代を最後として、出土が途絶えるという事実を重視する。LR1・LR2 は東地中海域では少なくとも 7 世紀前半まで出土が続いていることをあわせて想起すると、ドナウ流域における LR1・LR2 の出土の途絶は、ティベリウス 2 世期以降、ドナウ流域の軍に対して地中海域からのアンノナ・ミリタリスがもたらされていなかった可能性を示唆する。こうしたことや印章資料の分析などからクルタは、ティベリウス 2 世期に QE が廃止されたと主張する¹⁶⁾。

クルタのこのような見解に対してはグクツィウコスタスが、クルタが 2002 年の論考では利用しなかった印章資料をも踏まえて、ユスティニアヌス軍財務官あるいは QE に所属する官僚が 6 世紀後半～7 世紀にも存在した可能性を指摘している¹⁷⁾。

このような、QE をめぐるこれまでの議論において、注目すべきなのは以下の 3 点である。

- ① 上述したように、QE が道と同様の行政管区としての意味を持ち、その長官であるユスティニアヌス軍財務官が高位の行政職であること、また QE がドナウ流域に展開する軍の補給を重要な任務としていたことについては、異論はほぼない。
- ② QE がいつまで存在したのかについては、なお議論が必要である。
- ③ ユスティニアヌス軍財務官が軍事権限を持っていたのか否かについては、現在でも議論が二分されている状態である。

これらのうち、①に関しては現時点でこれ以上の議論をおこなう必要はないだろう。問題となるのは②と③であり、特に本稿で問題とするビザンツ艦隊との関連では③が重要である。なぜならば QE の管轄領域を結ぶ連絡手段は海上交通が中心になることに加え、ドナウ流域の軍への補給でもドナウ川の水運が活用されたこと、そしてドナウ川北岸から侵入してくる外敵に対応するため、ドナウ川には艦隊が配置されていたからである¹⁸⁾。印章や貨幣の発掘状況を見ても、黒海沿岸部とドナウ沿岸部からの出土数が比較的多いことは、ドナウ川（および黒海）に艦隊が存在していたことを強く示唆する¹⁹⁾。したがって、ユスティニアヌス軍財務官が軍事権限を持っていたのであれば、ドナウ艦隊もユスティニアヌス軍財務官の指揮下に入っていたことになる²⁰⁾。

また②の論点も無視できない。なぜならクルタが主張しているように QE がティベリウス 2 世期に廃止されているのであれば、「7 世紀前半までのビザンツ艦隊と、7 世紀後半以降のビザンツ艦隊

(カラビシアノイ、キビュライオタイ) との間に連続性が認められるのか」という議論において、QE が直接関連しなくなるからである。また QE が管轄領域内の艦隊に対する指揮権を保持していたとしても、QE が廃止された6世紀末以降はどのような指揮系統に再編されたのか、顧慮する必要が生じることになる。

本稿では②、③の2点を意識しつつ、6世紀から7世紀前半までのビザンツ艦隊（特に、QEの管轄領域内に展開していた艦隊）の状況について、検討をおこなっていく。その際、考慮に入れなければならないことがある。それは、同時代のQE以外のビザンツ帝国の行政・軍事制度との関係性である。はじめに述べたようにQEはユスティニアヌス1世によって536年に、事実上PPOを分割するかたちで設置された。また同じ時期、ユスティニアヌス1世はQE以外でもさまざまな行政組織・軍事組織の改編をおこなっていた。また6世紀後半から7世紀前半は、PPOを含む帝国の行政制度が大きく変化していく時代である。PPOの長官であるオリエンス道長官も7世紀中盤以降は重要性を失い²¹⁾、サケラリオスやゲニコス・ロゴテテースなどにとって代わられていく²²⁾。軍事制度についても、既に述べているようにQEはカラビシアノイ、そしてテマとの連続性という観点からの議論がおこなわれた。だが近年、ザッカーマンやハルドンらの研究の結果、テマの成立に関する理解は大きく変容しており、テマの成立は8世紀中盤～9世紀初頭であることが共通理解となりつつある²³⁾。したがってQEはもちろん、8世紀中盤には姿を消したカラビシアノイについても、テマとの連続性・関係性を論じるのはもはやあまり大きな意味を持たない。

したがって、QEの設置やその機能・展開については、ユスティニアヌス1世期及びそれ以降におこなわれた一連の行政・軍事制度の展開に関する研究動向に十分に留意しつつ、おこなう必要がある。従来の研究では、こうした点についてはあまり留意がされておらず、それがQEや艦隊についての理解を妨げていた傾向があるのは否めないからである。

資料が少ないため、本稿での分析も不十分な素描にとどまらざるを得ないが、6世紀から7世紀におけるビザンツ艦隊の変化の一端を示すことを目標としたい。

1 6世紀のビザンツ艦隊とユスティニアヌス軍財務官管区

本章では6世紀の状況について概観と分析をおこなうが、まず前提として述べておかねばならないのは、7世紀初頭まで黒海・中東部地中海域において、ローマ～ビザンツ帝国が基本的にその海域のほぼ全体を支配しており、重大な脅威・ライバルが存在していなかった、ということである。したがって大規模な艦隊を設置し、維持する必要性は乏しかった。海賊などへの対処を別にすると、古代末期に艦隊が必要となるような脅威が存在しえた地域は中部地中海方面と、ドナウ川流域のみであった。

中部地中海域では、5～6世紀にはイタリア半島・北アフリカのゲルマン系諸王国が潜在的な脅威となっていた。特にヴァンダル王国に対しては、460年代に艦隊を派遣したが敗北を喫している²⁴⁾。ユスティニアヌス1世時代の西方の再征服活動においても、ヴァンダル王国や東ゴート王国との戦いで艦隊は投入されている²⁵⁾。だが対ヴァンダル戦では海上では大きな戦いは起きなかった²⁶⁾し、対東ゴート戦争においても戦いの中心は陸上であった。

一方バルカン半島では6世紀、ドナウ北岸からバルカン半島内部への侵入を試みるアンテス人やフン人、アヴァール人や²⁷⁾、スラヴ人²⁸⁾などの脅威が継続していた。そのため帝国の防衛ラインと

してドナウ川の持つ意味は大きく、ドナウ川流域には数多くの城塞があった²⁹⁾。そしてドナウ川防衛のための艦隊も必要であった³⁰⁾。

はじめに述べたように、QE は 536 年にユスティニアヌス 1 世によって設置された。そしてその管轄領域には第 2 モエシアとスキティアという、ドナウ川およびその河口部に接する 2 属州が含まれている。第 2 モエシアよりドナウ川上流部に位置するダキア・リペンシスや第 1 モエシアはイリリクム道に所属する属州であり、QE の管轄下には入っていない。

QE が複数の属州を統括する「小規模な道管区」であることは、先述したように疑問の余地がない。問題となるのは QE が軍に対する指揮権を持っていたかである。この点については、「はじめに」でも示唆したように QE の状況のみを見ていたのではわからない。ゆえに以下、ユスティニアヌス 1 世時代の行政・軍事機構の状況をも念頭に置きつつ、分析をおこなっていく。

最初にユスティニアヌス 1 世時代の軍の構成について概観をおこなう。後期ローマ帝国において軍が機動野戦軍であるコミタテンセスと、辺境防衛軍であるリミタネイに区分されていたことはよく知られている。コミタテンセスのうち、ササン朝ペルシアと対峙する帝国東部には東部方面軍、バルカン半島西部にはイリリクム方面軍が展開していた。バルカン半島東部はトラキア方面軍の管轄である。またおそらくは中央軍（プラエゼンタレス I&II）も展開していた³¹⁾。また、これらとは別にドックスが指揮するリミタネイの部隊が各地に駐屯していた³²⁾。

ユスティニアヌス 1 世時代においても、このような状況は基本的には変化がない。だがいくつかの無視できない変化が起きている。第一に、東方で新たにアルメニア方面軍が設置された³³⁾。第二に、西方領域の回復に伴って、北アフリカとイタリアで新たな軍の設置がおこなわれた³⁴⁾。そして第三に、PPO 管轄下の諸領域において一連の改革がおこなわれた。例えばトラキア管区では、535 年 5 月にトラキアのプラエトル (Praetor Justinianus in Thracia) が新たに導入された。それまでトラキア管区では 6 世紀初頭にアナスタシウス 1 世 (在位 491-518 年) の命で建設された「長城」の防衛や管理のために 2 人のヴィカリウス (Vicarius) が任命されており、1 人が軍の指揮、そしてもう 1 人が行政を担当していた。これに対してユスティニアヌス 1 世が導入したトラキアのプラエトルは、2 人のヴィカリウスの権限を統合してトラキア管区における³⁵⁾ 行政権と軍指揮権を 1 人のプラエトルに付与するものであった³⁶⁾。

文武の官職の分離という、後期ローマ帝国の軍事・行政システムの原則から逸脱するかたちでトラキアのプラエトルが設置されているが、トラキアのプラエトルは唯一の例外ではない。むしろユスティニアヌス 1 世は 535 年から 536 年にかけて、以下に示すように同様の権限を持つ官職をあらたに多数、小アジアにも設置している。

官職名	設置年	典拠
ピシディアのプラエトル (Praetor Justinianus in Pisidia)	535 年	新法 24
フリギア・パカティアナの Comes (Comes Justinianus Pacatianae Phrygiae)	535 年	新法 24
第 1 ガラティアの Comes (Comes Justinianus primae Galatiae)	535 年	新法 24
リュカオニアのプラエトル (Praetor Justinianus Lycaoniae)	535 年	新法 25
トラキアのプラエトル (Praetor Justinianus in Thracia)	535 年	新法 26
イサウリアの Comes (Comes Isauriae)	535 年	新法 27
ヘレノポントスのモデラトル (Moderator Justinianus Helenoponti)	535 年	新法 28
パフラゴニアのプラエトル (Praetor Justinianus Paphragoniae)	535 年	新法 29
カッパドキアの Proconsul (Proconsul Justinianus Cappadociae)	536 年	新法 30
第 3 アルメニアの Comes (Comes Justinianus tertiae Armeniae)	536 年	新法 31

またエジプトでも、一部の属州で文武の権限が1人の *Dux et Augustalis* に統合されている³⁷⁾。

こうした官職に委ねられた軍は、各地に駐屯しているリミタネイであった。コミタテンセスについては同様の例は看取できないが、北アフリカではアフリカ道長官のソロモンらがアフリカ方面軍を率いている事例がある³⁸⁾。パーネルはソロモンらの事例はあくまでも例外的であると考えている³⁹⁾。確かに道長官がコミタテンセスをも率いる事例自体は例外的であるとは言えるが、1人の人間が文武両権を統括するという施策自体が例外的であったとはいいがたい。むしろササン朝ペルシアと対峙しているシリア地域以外では、ユスティニアヌス1世は各地の行政官に一定の軍事権限を付与する方向性を持っていたと考えるべきだろう⁴⁰⁾。

このような状況を踏まえた上で、QEの性格について分析をおこないたい。最初に考えなければならないのは、“*Quaestor*”という官職名である。上述したようにトルバトフや中谷氏は、“*Quaestor*”という語が軍事権限を含意しないという点を強調する。しかしながらユスティニアヌス1世が小アジアやトラキアに設置した官職の名前をも踏まえると、この指摘はあまり適切ではない。例えば *Praetor* という官職名に関してユスティニアヌス1世は、それぞれの官職を設置する際に発布された新法において、それが古代ローマの伝統を踏まえた命名であることを強調している⁴¹⁾。ユスティニアヌス1世が特に治世前半において、古代ローマ帝国の後継者であることを強く意識していたことはよく知られている⁴²⁾。“*Quaestor*”という命名も、そのような観点から評価する必要がある。またトルバトフらが、官職名のうち“*Quaestor*”を強調する一方で、“*Exercitus* (軍)”という部分については無視していることも不可解である。

次に考えなければならないのは、“*Justinianus*”という名称である。ユスティニアヌス1世がトラキアと小アジアに導入した官職については上述した通りであるが、これらのうち、イサウリアの Comes 以外はすべて官職名に“*Justinianus*”が含まれていることが注目される。つまり既に19世紀にビュアリが指摘しているように、“*Justinianus*”という皇帝の名前を与えられた官職は、みな文武双方の権限を持っているのである⁴³⁾。したがって、同様に“*Justinianus*”という皇帝の名前を与えられているユスティニアヌス軍財務官のみ軍事権限を持っていなかったと考えるのは、あまりにも不自然であろう。

以上要するに、QEと同時期のユスティニアヌス1世の施策をも踏まえると、QEは行政権限だけでなく、軍事権限をも持っていたことが強く示唆される。ユスティニアヌス1世はトラキアや小アジアで、属州や管区の行政官に一定の軍事権限を持たせる組織改編をおこなっていた。QEもかかる改編の一環として設置されたと考えるのが適切である⁴⁴⁾。

ただしQEの設置後の第2モエシアやスキティアの状況が比較的安定しており、大きな軍事行動がしばらくおこなわれなかったこと⁴⁵⁾も考慮に入れる必要がある。平穏な状況下ではQEの任務は当然、行政に関する業務が中心となる。また、QEの指揮下にあった軍事力が強大なものだったとは考えにくいことにも留意が必要である。先述したように6世紀には東地中海・黒海海域において重大な脅威は存在していなかった。したがってドナウ艦隊も、さほど大規模なものが必要だったわけではない。ザッカーマンが既に指摘しているように、資料で「ドロモン」とされる艦船も、さほど大きな船ではなかった⁴⁶⁾。残存する資料において、裁判や軍への補給といった行政に関連する業務のほうが目だつのも、このような状況では当然だった。

2 6世紀末以降の状況

(1) 6世紀末以降のユスティニアヌス軍財務官管区

ユスティニアヌス1世によって535-36年に導入された一連の新たな官職は、540年代以降廃止されるものも多かった。例えばトラキアのプラエトルは廃止され、トラキアのヴィカリウス⁴⁷⁾に取って代わられた。ただしトラキアのヴィカリウス⁴⁸⁾やポンティカのヴィカリウス⁴⁹⁾のように、540年代に新設された官職でも文武両権を統括しているものがある。一方でQEはユスティニアヌス1世期には特に大きな変更は受けていないようであり、はじめに述べた新法148、新法163からもわかるように、少なくともティベリウス2世期までは確実に存続していた⁵⁰⁾。

だがティベリウス2世期以降については、はじめに述べたようにクルタがアンフォラの出土状況などを根拠として、ティベリウス2世期にQEが廃止されたと主張している。

しかしクルタの主張には疑問が残る。クルタはLR1・LR2の出土状況を踏まえて、ティベリウス2世期に地中海側の属州からのアンノナ・ミリタリスの輸送が停止したと想定し、この点に基づいてティベリウス2世期、つまり580年前後にQEが廃止されたとしている。これは非常に重要な指摘であり、この時期にバルカン半島北部への軍の補給方法に何らかの大きな変化があった可能性は高い。だが、580年代にアンノナ・ミリタリスが停止したとしても、それをQEの廃止とイコールと見なすのは危険である。なぜなら、そのような想定は6世紀末以降のバルカン半島北部の状況を十分に顧慮しているとは言いがたいからである。

6世紀後半からアヴァール人の脅威が大きくなり、スラヴ人の南下もはじまっていたこと、そしてそれに対してビザンツ帝国もドナウ国境の防衛に努めていたこと⁵¹⁾はよく知られている。その過程の中で、QE管轄下の第2モエシアとスキティアは非常に大きな影響を受けた。580年代には第2モエシアとスキティアはアヴァール人の攻撃をうけ、ビザンツ帝国の支配も大きく動揺した⁵²⁾。一方でマウリキオス(在位582-602年)期の後半、590年代以降はビザンツ側が大規模な反撃に転じ、ドナウ国境をほぼ回復している⁵³⁾。そして7世紀に入ってから、近年では他ならぬクルタらの研究などに基づいて、620年頃にビザンツ軍が撤退するまで、ドナウ国境が維持されたことが明らかになっている⁵⁴⁾。このような状況を踏まえると、580年代に第2モエシアとスキティアへのアンノナ・ミリタリスの輸送が途絶するのは、ある意味当然のことである。一方で590年代以降に関しては、バルカン半島北部の軍へどのようにして必要な物資を補給していたのか、という点が、クルタの主張からは十分な説明ができない。先述したようにドナウ国境の防衛ラインは(580年代を別として)620年頃まで維持されていた。したがって彼らに対して、何らかの手段で補給が必要である。クルタは(敵からの略奪を含む)「自給自足」を強調している⁵⁵⁾が、あまり現実的な回答とはなっていない。特に590年代はドナウ国境部で大規模な軍事行動がおこなわれた時期であり、むしろそれ以前よりも軍への組織的な補給が不可欠になったはずである。つまりアンフォラの出土状況は、580年代にQE管轄下のバルカン半島北部の2属州でアヴァールやスラヴ人が活発な軍事行動をおこなっていたこと、そしてそれ以降にバルカン半島北部の軍に対する補給方法に何らかの改変が加えられたことは明らかにしているが、それ以上のことを示すものではなく、したがってQEが580年代以降存続したか否かを直接示す資料とはなりえない。

では、QEが580年代以降存続したか否かを示す資料はあるのか。年代記や法律などからそれを知ることにはできないが、印章資料がきわめて興味深い情報を提供している。すなわちグクツィウコス

タスが示しているように、6世紀末～7世紀においてもQEの下僚と思われる官職に就いている人物の印章がいくつか発見されている⁵⁶⁾。そして特に注目すべきなのが、ヨハネス＝プラギオテスという人物の、同じ型から作られた印章（おそらく7世紀前半⁵⁷⁾）が、キプロス島とバルカン半島のプレスラフから発見されていることである⁵⁸⁾。これは、7世紀前半においてもキプロス島とバルカン半島北部との結びつきが残存していたことを強く示唆する。またグクツイウコスタスは、ユスティニアヌス軍財務官のことと思われるプラエフェクトゥス・インスラルム（Praefectus Insularum）⁵⁹⁾のテオドロスの印章（7世紀の第4四半期～8世紀初頭⁶⁰⁾）の存在を根拠として、QEが少なくとも7世紀中盤まで存続したと主張している⁶¹⁾。

このように印章資料から見る限り、行政管区としてのQEが6世紀末以降も存続していたことを疑問視することは困難である。ただしこのことは、ユスティニアヌス軍財務官が直接ドナウ国境地域で軍を率いていたことを必ずしも意味しない。シュミットが指摘するように、ユスティニアヌス1世期以降、コミタテンセスの指揮官がリミタネイをも含めて軍の指揮をとることが繰り返されるようになった⁶²⁾。ドナウ国境地域でも、トラキア方面軍長官などがリミタネイをも含めて軍の指揮をとる、あるいはとろうとしていたことが資料から看取できる。興味深いのは、アセモス市の守備隊をめぐる、おそらくトラキア方面軍長官だったペトロス（マウリキオス帝の兄弟）⁶³⁾の行動である。テオフルクトス＝シモカッテスの記述によると、ペトロスはアセモス市の守備隊が優秀なことを知ると、それを自らの配下に加えようとした。だがアセモス市民と守備隊は、ユスティヌス2世（在位565-578年）から得た法令を根拠としてこれを拒否した。ペトロスはなおも守備隊を配下に加えようとしたが、激しい抵抗に遭って成功しなかった⁶⁴⁾。アセモス市の事例ではリミタネイは野戦軍長官の配下に入らなかったが、リミタネイがコミタテンセスとともに軍事行動をおこなうことがかなり一般化していたことも、強く示唆される。また同時期にドナウ流域で軍事行動をおこなっていたプリスコス⁶⁵⁾はシンギドゥヌム市の救援に向かう際、ドロモンを利用している⁶⁶⁾。これは、ドナウ艦隊がコミタテンセスとともに軍事遠征に参加していることを示す⁶⁷⁾。

このような事例から明らかなのは、理論上はQEの管轄下にあるドナウ艦隊などのドナウ国境地域の軍も、何らかの軍事遠征がおこなわれる場合には野戦軍長官の配下に入ることがあったということである。6世紀末のマウリキオス帝時代はカルタゴとラヴェンナにエクサルコスが導入され、帝国の境域部における文武の統合策がさらに進展した時期である。だが北アフリカやイタリア以上に困難な状況にあったドナウ国境においては、理論上はユスティニアヌス軍財務官の指揮下にある軍も、トラキア方面軍長官などの指揮下で軍事行動に参加することが増えていた。ユスティニアヌス軍財務官はエクサルコスと同等の権能を持つことはなかったのである。

以上要するに、ユスティニアヌス1世以降にもQEは存続した。そしてアヴァールの攻撃を受けてドナウ国境地域が大きな被害を受けた580年代に軍への補給などについて何らかの改変がおこなわれた可能性は否定できないものの、基本的には7世紀にいたるまでQEが存続していた。だがドナウ国境地域ではQE管轄下の軍や艦隊も、トラキア方面軍長官などが指揮するコミタテンセスとともに軍事行動をとることが増大していった。

(2) 7世紀前半の艦隊

マウリキオス帝失脚の原因となった軍団の反乱の原因がドナウ川北岸での越冬⁶⁸⁾であったことや、ドナウ流域において7世紀初頭まで貨幣や印章が出土する⁶⁹⁾ことなどを踏まえると、ドナウ艦

隊が7世紀、フォーカス（在位 602-610年）期以降も存続していたことは確実である。またその他にも、7世紀前半における艦隊の活動がいくつかの資料から看取される。例えば610年にヘラクレイオスがフォーカス帝を倒すためにコンスタンティノーブルに進撃した時、ヘラクレイオスは「防備を施した船隊（πλοῖα καστελλωμένα）」⁷⁰⁾を率いていた。ただしその船隊にはアフリカとマウレタニアからの多数の軍勢が乗っており、コンスタンティノーブルの攻略に向けて大軍を送り込むことが主目的だったようにも感じられる。

ヘラクレイオス（在位 610-641年）が皇帝となると、ビザンツ領へのササン朝ペルシアの侵攻が顕著になり、619年までにシリア・パレスティナとエジプトがペルシア支配下に入った。そしてこの時期になると、ササン朝ペルシアは地中海への進出を企てるようになる⁷¹⁾。例えば640年頃にシリアで書かれた年代記には、以下のような記述がある。

ペルシア軍がロードス島を攻撃してその地の将軍を捕らえた。また捕虜をこの島からペルシアに連行した。⁷²⁾

またアルメニアで660年代初頭に書かれたと思われるセベオスの歴史書には、以下のような記述がある。

皇帝（ヘラクレイオス帝）は自ら船に乗って海上に乗りだし、彼ら（ペルシア軍）と以下のように交渉した。「あなた方は何を望み、そしてなぜこの場所に來たのか？あなた方は乾燥した大地と同じように海で戦えると本当に考えているのか？」

（中略）

ペルシア皇帝は皇帝からの贈り物は受け取ったものの、使者を送り返そうとはしなかった。彼は軍勢に、船で海を渡ってビュザンティオン（コンスタンティノーブル）に向かうように命じた。船を準備して、ビュザンティオンとの海戦の準備に取りかかった。それを妨げるためにビュザンティオンから艦隊が出撃し、海戦がおこなわれてペルシア軍は敗北し、撤退した。ペルシア軍は4,000の兵と艦船を失い、同様の作戦を試みようとはしなくなった。⁷³⁾

これらの資料からわかるように、ササン朝ペルシアの艦隊が地中海やコンスタンティノーブル付近まで進出している。したがって地中海方面においてビザンツ艦隊が活動していなかった、あるいは活動が非常に停滞していたことがわかる。一方で、海戦においてビザンツ艦隊が勝利を収め、しかもその後ペルシアの海上進出の試みがおこなわれなくなることから、ペルシア艦隊の規模や装備も強力なものではなく、陸上での作戦の補助の域を出ていなかったことも示唆される。

また、626年にアヴァール人がコンスタンティノーブルを攻撃した際には、アヴァール人配下のスラヴ人が艦隊⁷⁴⁾をつくっているが、ビザンツ艦隊がどのような対応をとったのかは明確ではない⁷⁵⁾。だがいずれにせよ、620年代にビザンツ艦隊がコンスタンティノーブル近海で活動をおこなっていたことは疑えない。先述したように620年頃にドナウ国境は放棄され、トラキア方面軍も小アジアに移動してきた⁷⁶⁾。同様にドナウ艦隊もドナウ川流域から撤退してきて、コンスタンティノーブル近海で活動していたと考えるのが自然だろう。アヴァール人やスラヴ人への対応というのは、ドナウ艦隊の本来の任務でもある。

以上要するに620年代、ビザンツ帝国はコンスタンティノープル近海や地中海で、スラヴ人やササン朝ペルシアの挑戦を受けることになったが、ビザンツ艦隊はコンスタンティノープル近海で彼らを迎撃した。またササン朝ペルシアの艦隊にせよスラヴ人の艦隊にせよ、十分な装備を持っていたようには思えない上、彼らの脅威は一時的なものに終わった。したがってビザンツ帝国は、この時期以降に艦隊を増強する必要性はなかった。つまり7世紀前半まで、ビザンツの艦隊はそれ以前と同様の、小規模なものにとどまっていたと思われる。

ササン朝ペルシアやアヴァール人の脅威にビザンツ帝国は打ち勝つことができたが、その直後の630年代から、アラブの急速な拡大が開始される。630年代から640年代にかけて、ビザンツ帝国が対アラブ戦に艦船を利用している事例がいくつか看取できる。641年にはエジプト救援を目的とした艦隊がロードス島（QEの管轄区域内）に集結している⁷⁷⁾し、旧稿で指摘したようにシリア・パレスティナ沿岸部の諸都市に対して、海上からの補給・支援をもおこなっている⁷⁸⁾。だが当初、アラブは地中海に進出してこなかったため、ビザンツ帝国はやはり艦隊を増強する必要はなかった。つまり7世紀前半までの段階では、ビザンツ艦隊はそれ以前と大きく変わらない状況にあったと思われる。

3 新たな段階へ

640年代末以降、地中海をめぐる状況は大きく変化していく。なぜならばアラブが艦隊を創設して地中海に進出してくるからである。当時シリア総督だったムアーウィヤ（後にカリフ）の指揮下、アラブは艦隊を建造した。そして649年にキプロス島を攻撃した⁷⁹⁾のを嚆矢として、東地中海で急速に活動を活発にさせていった。ビザンツ艦隊も、セベオスによると649年頃⁸⁰⁾に一度はアラブ艦隊に対して勝利を収める⁸¹⁾ものの、654年にはコンスタンティノープル攻撃に艦隊が参加する⁸²⁾とともに、いわゆる「マストの戦い」（リュキア沖海戦）で皇帝コンスタンス2世（在位641-668/69年）自身が率いるビザンツ艦隊を撃破した⁸³⁾。

ザッカーマンによると、「マストの戦い」の帰趨には、アラブ艦隊とビザンツ艦隊の装備差が大きく影響しており、ビザンツ側は海戦における技能の点でもアラブに劣っていたという⁸⁴⁾。確かに7世紀前半までの、強力な脅威が存在しない状況を前提として置かれている艦隊の規模や装備では、ビザンツ帝国の滅亡・コンスタンティノープルの攻略を目標としていたアラブ艦隊に対抗することは不可能だったろう。ザッカーマンはコンスタンス2世治世、さらにいうなら654年以降、ビザンツ艦隊の急速な整備・増強が進展し、それまでの艦隊とは質・量ともに顕著な違いを見せるようになったと論じている⁸⁵⁾が、妥当な主張である。別稿でも論じたように、コンスタンス2世は663年にシチリア島に移動した後、シチリア島を拠点とする艦隊を創設している⁸⁶⁾が、このような方策も艦隊強化策の一環である。

したがって7世紀中盤以降、ビザンツ艦隊はそれまでのものとは質的にも規模の面でも、大きく異なるものへと変化していったとすることができる。その点で、7世紀中盤～後半に大きな画期を見るアルヴェレルやザッカーマンらの見解は理解できるものである。

しかしながらビザンツ艦隊は、7世紀中盤以降にまったくの無から構築されたわけではない。これまで述べてきたように、654年の「マストの戦い」以前にもビザンツ帝国には艦隊が存在していた⁸⁷⁾。

649年に新たに出現したアラブ艦隊に対して、ビザンツ艦隊が迎撃をおこなっていることは、それ以前からビザンツ艦隊が存在していたことを明らかに示している⁸⁸⁾。だが強化が進むアラブ艦隊に対して、ビザンツ艦隊は対応できなくなっていく。それが明らかになったのが「マストの戦い」をはじめとする654年の戦いであった⁸⁹⁾。654年の経験を契機として、ビザンツ帝国でもアラブに対抗するための艦隊の拡充・増強が開始された。だがそれは、ゼロからのスタートではなかった。7世紀前半以前とそれ以降のビザンツ艦隊は、規模や装備の点では大きな差があるものの、組織としての連続性を否定することはできない。

7世紀前半の小アジアの陸上兵力について論じたシュミットの議論は、このような観点からも示唆に富む。シュミットによるとユスティニアヌス1世期以降、各地で長期的な戦争状態が継続した結果、本来の管轄領域を越えて軍が動員されることが多くなった。また先述したようにコミタテンセスとリミタネイの枠組みを超えて、コミタテンセスの指揮官が軍の指揮をおこなうことも増えた⁹⁰⁾。そして7世紀初頭のササン朝ペルシアとの戦いできわめて大きなダメージを受けた結果、陸上兵力は事実上東方の軍（東部方面軍長官の指揮下）のみが残された。ササン朝ペルシアから奪回したシリア・パレスティナ地域でも、実際に展開していたのはドゥクス配下の軍だけとなっていた⁹¹⁾。だがその後テマ（の原型となる軍）が成立していく過程において、その組織的な基盤となったのはかつてのコミタテンセスの部局であったと、シュミットは論じている⁹²⁾。

シュミットの議論は、対ペルシア戦争によるコミタテンセスの打撃を過大に評価している⁹³⁾ 傾向もあり、行き過ぎの感は否めない。しかしながら、形骸化・弱体化しつつも一部残存していた旧来の組織が新たな組織の母体となった、という視点は重要である。このような変遷は、中央軍の組織を（少なくとも一部）継承して成立したと思われる⁹⁴⁾、オブシキオンに当てはまる。QEについても、同様のプロセスを想定することができるだろう。つまりQEの管轄下にあったドナウ艦隊の組織を継承し、それを拡充・増強することによって、7世紀後半以降の（東地中海域の）ビザンツ艦隊へと発展していった。7世紀には陸上においても海上においてもほぼ同様のプロセスを経て、アラブに対抗するための軍事システムが構築されていったのである⁹⁵⁾。

おわりに

本稿での分析を簡単に総括しておきたい。

536年にユスティニアヌス1世によって新設されたユスティニアヌス軍財務官は、バルカン半島北部と地中海側の属州を管轄下とする管区(QE)の長官として置かれた。QEはPPOの一部を分割して設置されており、PPOと同様に複数の属州を統括する行政管区としての意味を持っていた。そしてそれとともに、同時期に新設された“Justinianus”を名称に含む他の官職と同じく、ユスティニアヌス軍財務官は管轄区域内に展開する軍(リミタネイ)に対しての指揮権をも持っていた。

6世紀後半以降もQEは存続していく。だが6世紀後半にバルカン半島でアヴァール人などの活動が活発になると、QEの管轄区域内に展開する軍がトラキア方面軍長官などの指揮下に入って軍事行動を取ることも増えていった。そして620年頃にビザンツ帝国がドナウ国境を放棄すると、それまで主にドナウ川で防衛の任にあった艦隊も撤退して、コンスタンティノーブル近郊などでペルシアやスラヴ人の艦隊と対峙した。そして7世紀中盤以降、アラブが地中海に進出してきたのに対抗す

るため、旧来からある艦隊を母体としつつ、ビザンツ帝国も艦隊の拡充を進めていった。

これまでの QE についての分析は、QE の権限や任務ばかりに目が向いていた傾向が否めない。だが6～7世紀はビザンツ帝国の行政システムや軍事システムが非常に大きく変化していった時期である。これまでの研究では QE のみに着目する傾向が強かったため、(筆者も含め) ビザンツ帝国の変化の中に QE を位置づけるという視点が欠落してしまっていたと言わざるを得ない。また艦隊についても、7世紀における連続／断絶という問題に拘泥していた感は否めない。

7世紀中盤以降のビザンツ帝国は、さまざまな点でそれ以前の国家とは異なる制度や性格を持つようになっていた。したがってこの時期を、大きな画期と見るのは自然な流れである。だがそれと同時に、7世紀中盤以降のビザンツ帝国はそれ以前とまったく異なった国家となったわけではない。大きな画期であることを認識・強調するのと同様、前代からの連続性をも意識する必要がある。そしてまた反対に、連続性を過度に強調することも危険である。QE や艦隊をめぐる議論は、7世紀(およびその前後の時期)のビザンツ帝国や地中海世界の変化を考えていく上で陥りやすい陥穽を、我々に示してくれているともいえるだろう。

(本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(C)17K03050)による成果の一部である)

注

- 1) cf. 拙稿「七世紀のビザンツ帝国とアラブ—地中海をめぐる—」濱下武志(監修)、河村朋貴・小林功・中井精一(編)『海域世界のネットワークと重層性』桂書房、2008年、38-54頁(以下、拙稿(2008)と略)。
- 2) 拙稿(2008)、43-47頁。
- 3) A. H. M. Jones, *The Later Roman Empire 284-602*, Oxford, 1964(以下、Jones(1964)と略), pp. 280, 482-483.
- 4) 21世紀初頭までの研究史は、中谷功治氏が詳細なまとめをおこなっている。中谷功治「ビザンツ海軍の起源—quaestura exercitus をめぐって—」『人文論究』63-1、2013年、1-13頁(以下、中谷「ビザンツ海軍の起源」と略)。
- 5) Ch. Diehl, "L'Origine du Régime des Thèmes", in: id., *Études Byzantines*, Paris, 1905, pp. 276-292, pp. 290-291; E. Stein, *Histoire du Bas-Empire II: de la disparition de l'Empire d'Occident à la mort de Justinien (476-565)*, Paris, 1949, pp. 474-475.
- 6) H. Ahrweiler, *Byzance et la Mer: la Marine de Guerre, la Politique et les Institutions Maritimes de Byzance aux VII^e - XV^e siècles*, Paris, 1966(以下、Ahrweiler, *la mer* と略); H. Antoniadis-Bibicou, *Études d'Histoire Maritime de Byzance: a propos du "Thème des Caravisiens"*, Paris, 1966.
- 7) S. Szádeczky-Kardoss, "Bemerkungen über den "Quaestor Iustinianus Exercitus": zur Frage der Vorstufen der Themenverfassung", in: V. Vavřínek (ed.), *From late Antiquity to Early Byzantium: Proceedings of the Byzantinological Symposium in the 16th International Eirene Conference, Praha, 1985*, S. 61-64(以下、Szádeczky-Kardoss と略)。
- 8) F. Curta, *The Making of the Slavs*, Cambridge, 2001(以下、Curta(2001)と略), p. 185.
- 9) W. Brandes, *Finanzverwaltung in Krisenzeiten: Untersuchungen zur byzantinischen Administration im 6. -9. Jahrhundert*, Frankfurt a. M., 2002(以下、Brandes(2002)と略), S. 59-61(n. 261)。
- 10) S. Torbatov, "Quaestura Exercitus: Moesia Secunda and Scythia under Justinian", *Archaeologia Bulgarica* 1-3(1997), pp. 78-87.
- 11) J. Wiewiorowski, "Quaestor Iustinianus Exercitus – A Late Roman Military Commander?", *Eos* 93(2006), pp. 319-342(以下、Wiewiorowski(2006)と略), p. 321.
- 12) R. T. Ivanov, "Das römische Verteidigungssystem an der unteren Donau zwischen Dorticum und Durostorum (Bulgarien) von Augustus bis Maurikios", *Bericht der Römisch-Germanischen*

- Kommission* 78 (1997), S. 467-640 (以下、Ivanov (1997) と略), S. 536. ただしイヴァノフは QE の軍事権限の有無について明確に言及をおこなっているわけではなく、やはりジョーンズの態度に近い。
- 13) C. Zuckerman, "Learning from the Enemy and More. Studies in "Dark Centuries" Byzantium", *Millenium* 2 (2005), pp. 79-135 (以下、Zuckerman (2005) と略), pp. 111-112; 中谷「ビザンツ海軍の起源」。
- 14) Wiewiorowski (2006).
- 15) A. Sarantis, *Justinian's Balkan Wars: Campaigning, Diplomacy and Development in Illyricum, Thrace and the Northern World A.D. 527-65*, Prenton, 2016 (以下、Sarantis (2016) と略), pp. 148-149.
- 16) F. Curta, "Amphorae and Seals: The "Sub-Byzantine" Avars and the *Quaestura Exercitus*", in: Á. Bollók et al. (eds.), *Zwischen Byzanz und der Steppe: Archäologische und Historische Studien: Festschrift für Csanád Bálint zum 70. Geburtstag*, Budapest, 2016, pp. 307-334 (以下、Curta (2016) と略); id, "*Quaestura Exercitus*: The evidence of lead seals", *Acta Byzantina Fennica N.S.* 1 (2002), pp. 9-26 (以下、Curta (2002) と略)。
- 17) A. Gkoutzioukostas, "Published Lead Seals concerning *Quaestura Exercitus*", in: *Proceedings of the International Symposium, Dedicated to the Centennial of the Dr. Vassil Haralanov, Held in Shumen in September the 13th - 15th 2007*, Shumen, 2008, pp. 109-118. グクツイウコスタスはモニアロスとともに、QE に関する著作を 2009 年に刊行している (A. E. Γκουτζιουκόστας & Ξ. Μ. Μονίαρος, *Η Περιφερειακή Διοικητική Αναδιοργάνωση της Βυζαντινής Αυτοκρατορίας από τον Ιουστινιανό Α' (527-565): Η Περίπτωση της Quaestura Iustiniana Exercitus*, Θεσσαλονίκη, 2009) が、本稿執筆までに入手できなかった。
- 18) Ivanov (1997), S. 529; C. Băjenaru, *Minor Fortifications in the Balkan-Danubian Area from Diocletian to Justinian*, Cluj-Napoca, 2010, p. 24.
- 19) cf. Curta (2016), p. 311.
- 20) キプロス島やカリヤなどを拠点とする艦隊が存在していて、それらへの指揮権を持っていた可能性も想定可能であるが、ザッカーマンはドナウ艦隊以外の艦隊の存在を否定している。C. Zuckerman, "On the Byzantine Dromon (with a Special Regard to *De Cerim.* II, 44-45)", *REB* 73 (2015), pp. 57-98 (以下、Zuckerman (2015) と略), p. 90. なお、ハルドンはドナウ艦隊に加えて、コンスタンティノーブルとラヴェンナに小艦隊が置かれていたと考えている。J. Haldon, *The Byzantine Wars: Battles and campaigns of the Byzantine era*, Stroud, 2001, p. 24.
- 21) Brandes (2002), S. 63-179.
- 22) Brandes (2002), S. 180-238, 427-479.
- 23) Zuckerman (2005); J. Haldon, "A context for two "evil deeds": Nikephoros I and the origins of *themata*", in: O. Delouis et al. (eds.), *Le Saint, le Moine et le Paysan: Mélanges d'histoire byzantine offerts à Michel Kaplan*, Paris, 2016, pp. 245-265.
- 24) Ch. Courtois, *Les Vandales et l'Afrique*, Paris, 1955, pp. 200-204; W. Pohl, "The Vandals: Fragments of a Narrative", in: A. H. Merrills (ed.), *Vandals, Romans and Berbers: New Perspectives on Late Antique North Africa*, Aldershot, 2004, pp. 31-47, pp. 40-41.
- 25) cf. S. Cosentino, "La Flotte Byzantine face à l'Expansion Musulmane. Aspects d'Histoire Institutionnelle et Sociale (VII^e - X^e siècles)", *Byzantinische Forschungen* 28 (2004), pp. 4-20, p. 5.
- 26) Zuckerman (2005), p. 109.
- 27) Curta (2001), pp. 190-226.
- 28) 6 世紀後半以降に「スラヴ人」というエスニシティ／アイデンティティが生まれたとするクルタの主張に対しては、ダーデンらが批判をおこなっている。Curta (2001); B. J. Darden, "Who were the Sclaveni and where did they come from?", *Byzantinische Forschungen* 28 (2004), pp. 133-157; cf. Sarantis (2016), pp. 72-82.
- 29) Ivanov (1997); C. Băjenaru, *op. cit.*
- 30) Sarantis (2016), p. 85; M. Whitby, *The Emperor Maurice and his Historian: Theophylact Simocatta on Persian and Balkan Warfare*, Oxford, 1988 (以下、Whitby (1988) と略), p. 161.

- 31) ユスティニアヌス 1 世期の軍の構成については、D. A. Parnel, *Justinian's Men: Careers and Relationships of Byzantine Army Officers, 518-610*, London, 2017 (以下、Parnel (2017) と略), pp. 14-18.
- 32) また、皇帝の護衛などを主な任務とするスコラエヤエクスクビトルなどがコンスタンティノープルに存在していた。
- 33) *Codex Justinianus* I.29.5.
- 34) Jones (1964), pp. 655-656.
- 35) 535 年以降のプラエトルの担当領域については、535 年以前と同様「長城」周辺とみなすか、あるいはトラキア管区全体とみなすかで議論がある。Wiewiorowski (2006), p. 332; Sarantis (2016), p. 140.
- 36) *Novella* 26.
- 37) *Edictum* 14. 539 年頃以降、第 1 アエギュプトゥス、第 1 アウグスタムニカ、テバイス・インフェリオルにそれぞれ Dux et Augustalis が任じられた。なお、エジプトでは 5 世紀にも 1 人が文武の両権を統括する事例があったことにも注意。B. Palme, "The Imperial presence: Government and army", in: R. S. Bagnall (ed.), *Egypt in the Byzantine World 300-700*, Cambridge, 2007, pp. 244-270, p. 248.
- 38) Jones (1964), p. 656.
- 39) D. A. Parnel, "Justinian's Men: The Ethic and Regional Origins of Byzantine Officers and Officials, ca. 518-610", Ph.D. thesis of the Saint Louis University, 2010, p. 159. なお、本論文を発展させたパネルの著作 (Parnel (2017)) には、この部分に対応する記述はない。
- 40) ただしそれは、ユスティニアヌス 1 世が確固たる方針や理念を持って改編をおこなっていたことを示すものではない。たとえば小アジアやトラキアでの改編は、PPO の権限を制限する方向性といえるが、エジプトではそれまでよりも PPO の影響力が強まった改編がおこなわれたとも解釈可能である。cf. G. Malz, "The Date of Justinian's Edict XIII", *Byzantion* 16-1 (1942-43), pp. 135-141, pp. 139-140.
- 41) 例えばピシディアのプラエトルやフリギア・パカティアナのプラエトルについては *Novella* 24. Praefatio.
- 42) M. Meier, "Das Ende des Konsulats im Jahr 541/42 und seine Gründe. Kritische Anmerkungen zur Vorstellung eines 'Zeitalters Justinians' ", *ZPE* 138 (2002), S. 277-299.
- 43) J. B. Bury, *A History of the Later Roman Empire from Arcadius to Irene (395 A.D. to 800 A.D.)*, London, 1889, p. 27.
- 44) 上述したように、同時期に東部方面軍を分割してアルメニア方面軍が設置されているが、PPO を分割して QE を設置したのと対称関係にあるように思われるのは興味深い。
- 45) おそらく 540 年代前半にアンテス人が侵入した後、559 年・562 年のフン人の侵入まで、ドナウ下流部の 2 属州は大きな外敵の脅威を受けていない。また 559 年・562 年のフン人の侵入も、大きな被害をもたらしたわけではないようである。Sarantis (2016), pp. 247-253, 336-374.
- 46) Zuckerman (2015), pp. 61-63.
- 47) 535 年以前のトラキアのヴィカリウスとは任務が異なる。J. Wiewiorowski, "Βικάριος Θράκης (Vicarius Thraciae) as the Roman Official of the New Type", *Bulgaria Mediaevalis* 4-5 (2013), pp. 297-306 (以下、Wiewiorowski (2013) と略)。
- 48) 再導入されたトラキアのヴィカリウスがいつ置かれたのかは不明だが、ユスティニアヌス 1 世期と思われる。Wiewiorowski (2013), p. 300; Jones (1964), p. 1126 (n. 60)。
- 49) *Edictum* 8.
- 50) リーは、一定の効果をもたらしたため QE が存続したと考えている。A. D. Lee, "The Empire at War", in: M. Maas (ed.), *The Cambridge Companion to the Age of Justinian*, Cambridge, 2005, pp. 113-133, p. 120.
- 51) Sarantis (2016), pp. 375-386.
- 52) Sarantis (2016), pp. 375-378; cf. 倉橋良伸「マウリキオス帝の所謂アンキアロス親征について—ペルシア戦争(五七二—九一)後のローマ帝国—」『上智史学』35, 1990 年, 66-90 頁。
- 53) マウリキオス帝時代のバルカン半島におけるビザンツ帝国の軍事行動については、倉橋前掲論文; Whitby (1988), pp. 138-165.

- 54) Curta (2001), p. 189.
- 55) Curta (2002), p. 17; Curta (2001), pp. 188-189.
- 56) A. Γκουτζιουκόστας, “Παρατηρήσεις σχετικά με το πρόσφατα δημοσιευμένο σφραγιστικό θλικό (6ος - 7ος αι.) από τη Βουλγαρία (Μυσία Δευτέρα, Αιμίμοντες, Θράκη)”, *Εγνατία* 14 (2010), pp. 9-18 (以下、Gkoutzioukostas (2010) と略).
- 57) キプロスで発見されているヨハネス＝プラギオテスの印章についてはメトカフが8世紀のものとして推定しているが、グクツィウコスタスはプレスラフで発見された印章に基づいて、7世紀前半のものと考えている。D. M. Metcalf, *Byzantine Lead Seals from Cyprus*, Nicosia, 2004, No. 172, 173, 188, 281.
- 58) Gkoutzioukostas (2010), p. 17.
- 59) Gkoutzioukostas (2008), pp. 111-113.
- 60) ただしクルタは6～7世紀の印章としている。Curta (2016), pp. 315-317, 323.
- 61) Gkoutzioukostas (2010), pp. 12-13.
- 62) O. Schmitt, “From the Late Roman to the Early Byzantine Army. Two Aspects of Change”, in: A. S. Lewin & P. Pellegrini (eds.), *The Late Roman Army in the Near East from Diocletian to the Arab Conquest: Proceedings of a Colloquium Held at Potenza, Acerenza and Matera, Italy (May 2005)*, Oxford, 2016, pp. 411-419 (以下、Schmitt (2016) と略), p. 413. また、中央軍も各地に援軍として派遣された結果、単独の野戦軍としての実体を失っていったとシュミットは考えている。
- 63) J. R. Martindale, *The Prosopography of the Later Roman Empire Vol. III A.D. 527-641*, Cambridge, 1992 (以下、PLRE III と略), #Petrus 55.
- 64) Theophylactus Simocatta, C. de Boor (ed.), *Theophylacti Simocattae historiae*, Leipzig, 1887 (以下、Simocatta と略), vii.3.
- 65) 580年代末以降、プリスコスとコメンティオロスという2人の人物がバルカン半島北部での戦いの指揮官を務めることが多い。彼らはおそらく、その多くの期間トラキア方面軍長官、あるいは野戦軍長官 (magister militum vacans) だったと思われる。PLRE III, #Comentiolus 1, #Priscus 6.
- 66) Simocatta, vii.10.
- 67) サデツキ＝カルドシュはプリスクスがユスティニアヌス軍財務官であったと推測しているが、野戦軍長官だったと考えるほうが論理的である。Szádeczy-Kardoss, S. 62.
- 68) Simocatta, viii.6-7.
- 69) クルタが指摘するように、「バルカン半島北部の初期ビザンツの居住地において、602年という年は考古学的な重要性を持たない」。Curta (2001), p. 189.
- 70) Theophanes Confessor, C. de Boor (ed.), *Chronographia*, Leipzig, 1883 (以下、Theophanes と略), p. 298.
- 71) V. A. Dmitriev, “The Sasanian Navy revisited: An unwritten chapter in Iran’s military history”, *The International Maritime History* 29-4 (2017), pp. 727-737; M. Hurbanič, “The Eastern Roman Empire and the Avar Khaganate in the Years 622-624 AD”, *Acta Antiqua* 51-3 (2011), pp. 315-328, p. 322.
- 72) *A Chronicle composed AD 640*, in: A. Palmer (tr.), *The Seventh Century in the West-Syrian Chronicles*, Liverpool, 1993, pp. 5-24, p. 18. なおこの前年に、スラヴ人がクレタ島などを攻撃したことも、この資料は伝えている。ibid.
- 73) R. W. Thomson (tr.), *The Armenian History attributed to Sebeos Part I. Translation and Notes*, Liverpool, 1999 (以下、Sebeos と略), ch. 38 (pp. 78-79).
- 74) 『復活祭年代記』では「丸木舟 (τὰ μονόξυλα)」と書かれているので、さほど本格的な装備を備えたものではないだろう。L. Dindorf (ed.), *Chronicon Paschale*, Bonn, 1832 (以下、*Chronicon Paschale* と略), p. 724.
- 75) 9世紀初頭にコンスタンティノーブル総主教を務めたニケフォロスの『簡約歴史』では、スラヴ人の艦隊に対して勝利を取めたとされている (Nikephoros Patriarch of Constantinople, C. Mango (ed.), *Short History*, Washington D.C., 1990, ch. 13 (pp. 58-60).) が、同時代資料ではむしろ嵐によってスラヴ人の艦隊がダメージを受けたようにも読める。Theodorus Syncellus, *Historia brevis de obsidione Avarica*

- Constantinopolis*, in: L. Sternbach, *Analecta Avarica*, Cracow, 1900, pp. 14-15; Georgius Pisides, *De Bello Avarico*, PG 92, c. 1259-1294, c. 1289-1292; Zuckerman (2005), pp. 112-113. ただし現存する『復活祭年代記』の該当箇所 (*Chronicon Paschale*, p. 724) には欠損があるため、その箇所に海戦の記事があった可能性はある。M. Whitby & M. Whitby (tr.), *Chronicon Paschale 284-628 AD: Translated with notes and introduction*, Liverpool, 1989, pp. 178-179 (n. 473); cf. Zuckerman (2005), p. 113. またフルバニッチは、金角湾におけるビザンツ艦隊の活動 (金角湾を封鎖してスラブ艦隊の行動を封じる) を指摘している。M. Hurbanič, op. cit.
- 76) 国境地域の守備隊は消滅したか、トラキア方面軍に統合されたのだろうか。
- 77) R. H. Charles (tr.), *The Chronicle of John, Bishop of Nikiu*, London, 1916, ch. 120 (p. 192).
- 78) 拙稿 (2008)、41 頁。
- 79) バラズリー (花田宇秋訳) 『諸国征服史 1』岩波書店、2012 年、299-300 頁。
- 80) 海戦のおこなわれた時期については、J. Howard-Johnston, *The Armenian History attributed to Sebeos Part II. Historical Commentary*, Liverpool, 1999, p. 261.
- 81) Sebeos, ch. 45 (pp. 111-112).
- 82) Sebeos, ch. 50 (pp. 145-146).
- 83) Theophanes, pp. 345-346.
- 84) Zuckerman (2005), pp. 114-117; Zuckerman (2015), p. 69.
- 85) Zuckerman (2015), pp. 72, 91; Zuckerman (2005), pp. 115-116.
- 86) 拙稿「コンスタンス二世のシチリア進出—七世紀中盤のビザンツ帝国と中部地中海—」『史林』81-5、1998 年、144-167 頁。
- 87) アルヴェレールも、7 世紀初頭に地中海や黒海の拠点港湾に、小規模な艦隊が配置されていたと考えている。Ahrweiler, *la mer*, pp. 11-12.
- 88) その年のうちに、新たに艦隊を建造するのはきわめて困難である。
- 89) 「マストの戦い」と同じく 654 年におこなわれたコンスタンティノープル攻撃も、アラブ艦隊の強力さをビザンツ帝国の人びとに実感させる事件だったろう。この攻撃に対して、ビザンツ帝国側が効果的に対抗できていたことは資料からは看取できない。cf. I. Kobayashi, “By His Upraised Arm God Saved The City”: Byzantine and Arab Strategy in the mid 7th century Asia Minor”, in: T. Minamikawa (ed.), *New approaches to the Later Roman Empire*, Kyoto, 2015, pp. 147-161.
- 90) シュミットは、6 世紀末までに帝国東部の 5 つの野戦軍長官 (*magister militum*) は事実上名目だけのものとなり、東方とヨーロッパ (バルカン半島) のそれぞれにある程度まとまった軍団が残されるだけとなった (その他にイタリア、北アフリカ、スペインに小規模な孤立した軍団が存在) と考えている。Schmitt (2016), p. 415.
- 91) O. Schmitt, “Untersuchungen zur Organisation und zur militärischen Stärke oströmischer Herrschaft im vorderen Orient zwischen 628 und 633”, *BZ* 94-1 (2001), S. 197-229.
- 92) Schmitt (2016), p. 416.
- 93) 例えば 630 年代以降も、アルメニアにはアルメニア方面軍が駐屯していた。拙稿「首都を離れるビザンツ皇帝—コンスタンス 2 世とアルメニア—」服部良久 (編) 『コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパ史—紛争と秩序のタペストリー—』ミネルヴァ書房、2015 年、108-128 頁。
- 94) cf. J. Haldon, “More Questions about the Origins of the Imperial Opsikion”, in: A. Beihammer et al. (hrsg.), *Prosopon Rhomaikon: Ergänzende Studien zur Prosopographie der mittelbyzantinischen Zeit*, Berlin, 2017, pp. 31-41.
- 95) もちろん 7 世紀前半までに消耗して弱体化していた陸上兵力と、以前から不十分な戦力しか持っていなかった艦隊との違いは念頭に置く必要がある。

(本学文学部教授)